

おおさか
KEY
わーど
第11回

現代版「高津の富」はワールドカップのチョコレートトロフィー
上方落語の「風土記」を行く



写真：針のついた棒で「エイヤ!」。高津宮「とんど祭」より。

「高津の富」と聞いて、反射的に「子の千三百六十五番…」というつぶやきが頭の中でおこったら、立派な落語ファンである。ナンの話かという、この数字は上方落語「高津の富」に登場する一等賞・千両の当たりくじの番号なのである。高津宮は、仁徳天皇を御祭神に仰ぎ、古くから大阪人に親しまれてきた。今はビルやマンションが邪魔で見えないが、高台にある絵馬堂は、六甲や淡路島がのぞめるほど眺望が開け、眼下に道頓堀川と芝居街を見下ろすことが出来た。この絵馬堂がことの発端となる落語「崇徳院」も有名である。

「高津の富」のストーリーはこうだ。大川町(現、大阪市中央区北浜)の宿屋に、鳥取の超大金持ちが泊まった。実はその正体は金のないからっけつで、呑み食いして適当に逃げてこましたろという魂胆なのだが、大ボラをまにうけた宿の亭主から、高津宮(現、中央区高津)の富くじを一分で買わされるはめになる。翌日の高津宮境内は、札を突いて当たりが決まるのを待つ群衆がざわつき、二番くじは自分にあたると勝手に信じ、一人芝居で怒ったり、のろけたり、笑ったりする男の妄想が面白い。一等は、なんと無銭宿泊の男が射止めるのだが、当たったと気づいての、びっくりぎょうてんぶりが笑いを誘う。

現在、絵馬堂には、飄々としたタッチのイラストで知られる成瀬國晴画伯による「高津の富」の絵馬が奉納

されている。画伯は、高津宮にも近い日本橋三丁目の旅館「むかでや」に生まれ、戦前のお大阪に関する著作も多い。平成19年に池田市落語ミュージアムで個展「成瀬國晴と落語の世界展」も開いておられる。

また、「高津の富」では、戦後、上方落語を復興させ、四天王として知られる五代目桂文枝師匠が忘れられない。艶のある芸風で知られ、「はめもの」をとりいれた芝居も得意だった。高津宮境内にある、その名も「高津の富亭」で、文枝師匠は、落語会以外に蕎麦打ちの会も主催されたという。平成17年3月12日に逝去されたが、二ヶ月前の1月10日、「高津の富亭」で演じた演目が「高津の富」であり、これが最後の口演となった。その縁もあって境内に「五代目文枝之碑」が建立されている。

懐かしい藤山寛美さんの松竹新喜劇にも「大当たり高津の富くじ」があるが、正月の「とんど祭」では、落語にちなんで干支に数字を組み合わせた木札を突く、同宮恒例の現代版「高津の富」のイベントが開催されている。これまで懸賞品として、氏子さんなどの寄進による〈高級フレンチレストランのお食事券〉〈サッカー・ワールドカップの優勝トロフィーをかたどった特製チョコレート(重さはなんと1.2kg)〉〈お米60kg〉などが登場した。さすがに本物の〈小判千両〉の懸賞品はないが、「落語スピリッツ」いまでも高津に躍動せりである。